

エゾマツ

北海道ボランティア・
レンジャー協議会
エゾマツ13号
平成2年5月14日
発行責任者
河村 千束

春は風に乗って

河村 千束

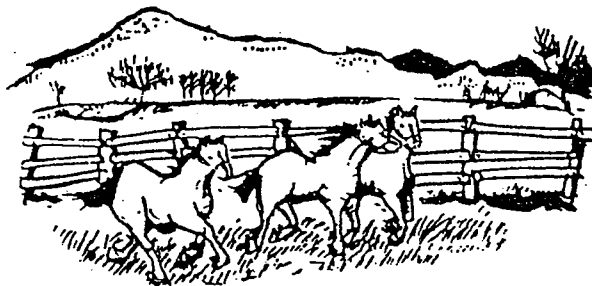
「春は馬糞風に乗ってやって来る」とは札幌の古い風物詩であった。乾燥した馬糞が春一番の風で舞い上がり、街をすっぱりと包む頃、家々の「かまど」から鯨を焼く煙が漂う。その鯨を人々は「春告魚」といって、食膳に出ると早春の訪れを感じたものでした。

当時の人々の生活は今日ほど豊かでなかったが、親しみと素朴な人情があって、春の巡り来るたびにあたたかい目覚めを感じたのも先頃のように思い出されます。それに引きかえ生活が近代化し、豊かになったこの頃は「馬糞風」にかわって「車粉風」が吹き、鯨は「幻の魚」となって食膳から姿を消して久しくなり、春の風に味気なさを感じているこの頃であります。

しかし北国の長い雪の中での生活から解放され、日一日と雪が融け始めると、黒々とした大地が顔を出す。そこには小さな新しい生命の躍動が目映り、大地の暖かさを感じます。その大地の暖かさの中で草花は静かに芽吹き、木々の芽が一斉に綻びは始めると、春の香りが春風に乗って人々を包みます。森の中では木々の柔らかい騒めき、賑々しい小鳥の囀りが、「せせらぎ」のリズムに乗って、美しいハーモニイをかもし出しつつ、人々に歓喜を与えてくれます。やがて春も深まり吹吹く風も暖かくなると、人々は森へ野へと新しく芽生えた旬の味を求めて春を楽しみ、温んだ小川の流れにふれて、春の心地よさを肌で感じます。このように総ての生物の躍動と息吹を五感で感ずるのも春です。

私は季節の移り変わりに節目のあるこの地の自然を五感を活用して楽しむことをモットーとしてその恵みと新しい発見に努めております。

今年も又春風に乗って送られてくる自然からのメッセージを求めて、野山をさまよっています。



「春」

4回生 佐々木 幸夫

一年を通じて一番大きく環境の変化が見られる時期は、私の数少ない体験で恐縮だが、3月から4月にかけているように思う。

この変化は、何も自然界にかぎらず人間社会でも同じ傾向にあるのではないだろうか。

それにしても、この変化の激しさはそのなかに、希望と期待感をはらんでいるよういように思われる。

この時期は、北海道で生まれ育ったものにとって半年に及ぶ長い冬からの解放感と、日一日と汚れた枯葉色から新緑が増すいとりどりの変化に、何とも表現しがたい、それこそ住んでいるものだけが分かると言った充実感が中心にみなぎってくる。4月1日の日曜日、昨年の秋以来ご無沙汰していた私のフィールドにしている野幌森林公園のエズリハコースの一部を歩いた。

幸い当日は好天に恵まれ、結構、散策を楽しんでいる家族連れも多く、大沢口の駐車場には10数台の乗用車が入っており、その駐車場直前の三又路角にある喫茶「樹」も開店していた。

林内に入ると、まだ積雪が深いところでは50cm近くもあり、歩くスキーを楽しんでいる人もいるがコースのなかで全く雪のないところもあった。

私のフィールドコースにしている散策路沿いは、それなりに変化がありなかなか面白い。樹木の種類やその粗密・高低で積雪の有無、防風、気温の変化が分かるような気がする。

樹種については、昨年8月から再々見ているので、葉がなくてもある程度は分かっているつもりだが、さて現実に裸の状態で見ると、何か心もとなく「この木は何の木」と自問自答しながら、足元も確かめつつわずか3km足らずの距離を2時間余りも費やしてしまった。

今の時期は、このコースに数本あるヤナギが通称ネコヤナギと言っている一見、猫の指のような形のふっくらした芽を付けているものから、ヤナギには違いないが枝先が細く、芽も小さいものなど個体で差があるのは樹種が異なるせいと思われる。

ものの本によると、ヤナギの種類は日本では約50種と言われておりしかも、まざり易いので交雑種になるとその同定は専門家でも大変なことだそうだ。

北海道新聞の読者の声欄で、3月11日、13日、17日と3回にわたり、自然保護に少なからず関心のある人達に話題を提供してくれた野幌森林公園での「白銀を巡るスキーの集い」に参加した。その時のコースと同じではないが、ネコヤナギ(ヤマネコヤナギ)だとのことだったので、我がコースのネコヤナギでないヤナギはエゾノカワヤナギかカワヤナギか今後の自然観察にまつことになる。文章をここまで書きながらある図鑑を見ると、ネコヤナギと言う別名でも方言でもない立派な樹種があった。そうすると、さっきのバッコウヤナギはこのネコヤナギかもしれない。こうなっていくと、自分だけの判断(同定)に迷いが生じてくるので、ベテランに随行してお教を乞う機会を是非作らなければと思っている。

そのほかのコースで1カ所、斜面にフクジュソウが開花盛期といった感じで、黄色の色鮮やかに彩っている風景もみられる。

林内の雪のないところでは、常緑小低木のエゾユスリハ、フッキソウ、ツルシキミ、ハイイガヤなどが見られ、これに併せて高木から亜高木の樹木の植生変化で、野鳥の種類も異なり、その姿やさえずり、さらにキツキ類のドラミングなどが見聞され、満足のいく平成2年春の最初のフィールドコースであった。

(平成2年4月3日記)

「士別の自然と親しむ会」のこと

余川 達也

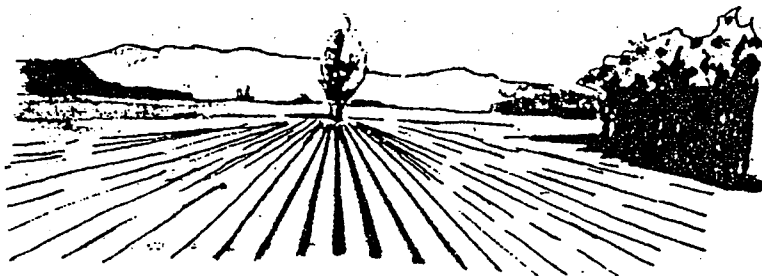
私の住む士別市は、道北の入り口(?)塩狩峠から25Km、剣淵川が天塩川に出会うところにあります。気候的には一口でいうと、夏暑く冬寒い割には雪が多い、という、良く言えばメリハリがはっきりした所ということにでもなりませうか。こういう街ですが、市街地には原生に近い状態の鎮守の杜があり、また天塩川沿いの畑の真中には小さいながら三日月湖(沼)があり、といった具合に、身近なところにも豊かな自然が残されているのであります。

さて、この街に昨年暮れ、「士別の自然と親しむ会」の発足を考える人の会」なるものができました。私も参加させて頂いているのですが、文字通り士別の自然と親しみ、身近に接することによって、郷土の自然とそれを守る心を育てよう、ということを目的に、いろんな人が集まってきました。職業では、役所の人をはじめ地元新聞の記者さんやお寺の住職さん、飲食店のおかあさんから学校の先生、ct・・・ct・・・。

また、自称キノコの神様や酸性雨の研究をしている先生、水質検査の専門家や雑草ばかり調べている人・・・といった特技を持った人がいて、名簿には全部で18人が名を連ねました。何よりもこの層の厚さがうれしくてたのもしく、今のところはのんびりマイペースで活動していますが、もう少し暖かくなったら観察会等も行い、来年までには会の名前から「の発足を考える人の会」をはずせるようにしたいと思っています。

人間は足りているとその有難さを忘れ、つい粗末にしてしまうことが多くあります。自然の多く残された北海道に住む我々は、自然の豊かさゆえにときにその有難さを忘れてしまいます。我々はこの道北の街に残された自然の素晴らしさを日々感じることによって、積極的に守っていかねばならないと思っています。動きはじめたばかりの小さな集まりですが、士別の大きな自然を相手にどこまでやれるか、乞う御期待。

※ 余川さんからは、更に追伸に「・・・なお、小生が昨年、雑草の呼び名について調査したものがあまして、なかなか面白い結果が出ましたのでいっしょにお送りします。」とありましたので、次ページにも余川さんの調査結果等を掲載させていただきました。



エゾノサヤヌカグサ *Leersia oryzoides* の地方 (地域) 名について

士別地区農業改良普及所 余川 達也

エゾノサヤヌカグサは、水田雑草として士別地域では比較的水ビュラーなものである。この雑草が農家の人にとどのように呼ばれているか、営農技術懇談会の場で拾い集めてみた結果を下にまとめた。

調査方法

士別市中士別町、上士別町の一部で聞き取り調査

調査結果

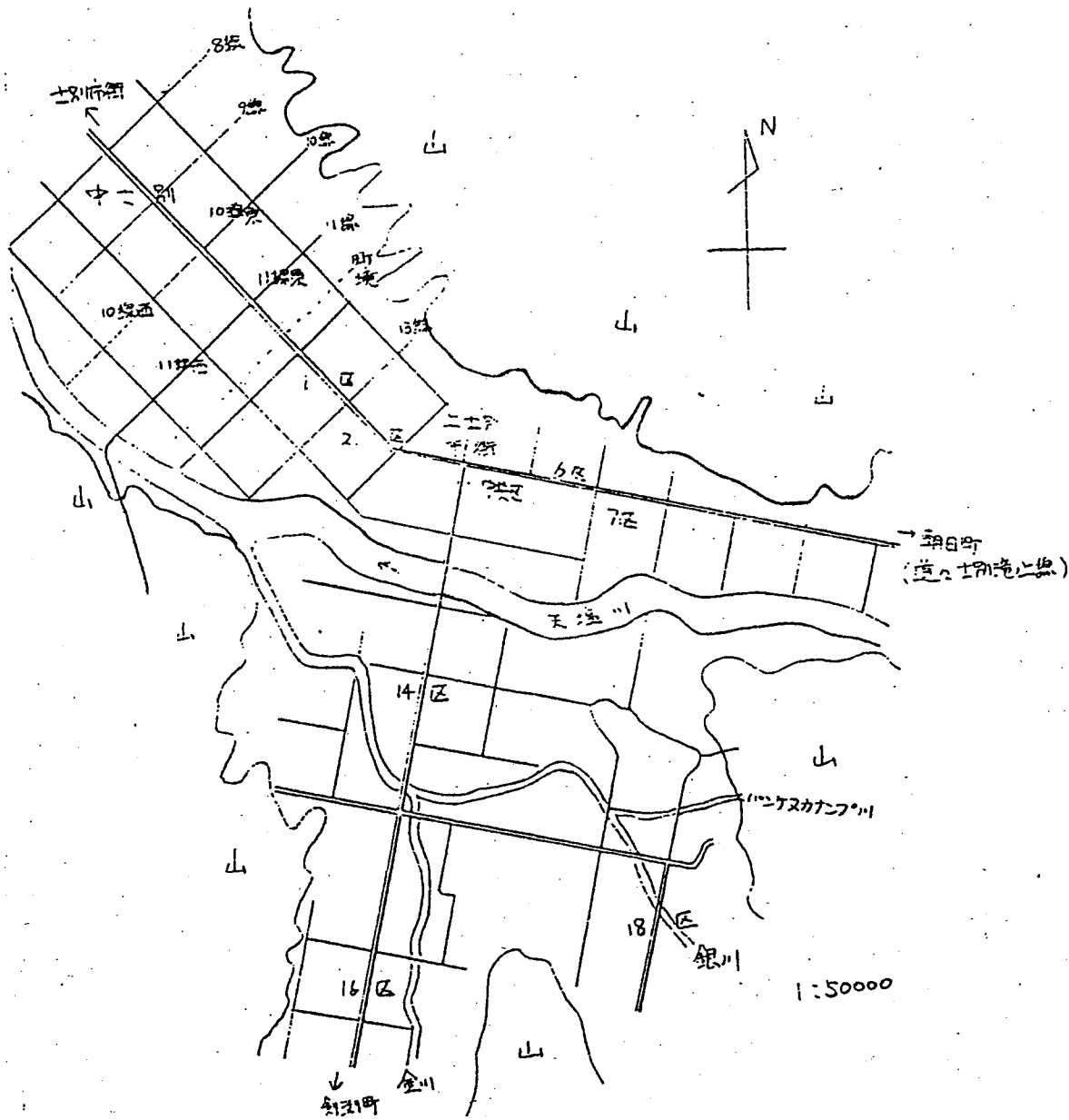
地区 (部落) 名	呼び方
中士別町9~11線西	カヤクサ、ネコノシタ
中士別町10~11線東	ネコノシタ
上士別町1・2区	ヤチガヤ、チョットマテ
上士別町中央・6・7区	ネコノシタ、チョットマテ
上士別町14区	スネガッチャキ、ヒッカキグサ、ネコノシタ
上士別町16区	イナグサ
上士別町18区	ネコジタ
温根別町の一部	コシマキメクリ

呼び方について

- ・イナグサ エゾノサヤヌカグサの小穂の形がイネに似ているところからきたと思われる。
- ・ヤチガヤ ヤチ (湿地) に生えるカヤ様の草、または単にカヤに似た草を指したもののか。
- ・カヤクサ
- ・スネガッチャキ いずれもこの草の形態的特徴による。この草がかなり長くなり
- ・ヒッカキグサ 　また節部には逆向きの剛毛があるため、田んぼを歩くとスネや
- ・チョットマテ 　腿のあたりにひっかかるところからこう呼ばれると思われる。
- ・コシマキメクリ
- ・ネコノシタ 　この草の手ざわりがザラザラしているので、これを猫の舌 (逆向きの
- ・ネコジタ 　小突起がありザラザラする) にたとえて、ネコノシタ、ネコジタが出たと思われる。

参考

上士別町は開拓時代、新潟、奈良、山形、徳島、愛媛、福島の各県からの入植者が多かったといわれている。(中士別町に関しては詳しい資料がないが、おおよそ上士別町に近いと思われる) これら入植者の持ち込んだ方言も、雑草の呼び方に少なからず影響を与えていることも考えられる。また、調査した地域の位置関係の略図を別紙に示す。



住吉浜から その2

函館 木村 マサ子

今年は、雪が少なく函館山の日当たりの良いところでは、キクザキイチゲやキバナノアマナが2月末から咲きだし、今年は、春が早いと騒いでいる人間に比べ、海辺の鳥たちは正直です。

前浜でのウミネコの初観察は3月9日、漁師が「ウグイス鳴イデタヤ」と知らせてくれたのは、4月8日で例年通りに春を告げております。公園の桜が満開になる5月始め頃には、イソヒヨドリが求愛給餌が見られるでしょう。

私が前浜と立待岬周辺の観察を始めたのは5年前からです。それまでは、各地で開かれる観察会へ出かけて行ったのですが、自分の住んでいる町周辺位は、知っておきたいと考え、犬の散歩や休日にはカメラを手に観察、気付いたことをメモしたりしてました。ところが、それらを整理してみると一年を通し「花ごよみ」を作れるようになり、更に、周辺地域の歴史をしるにつれ、史跡や見どころを紹介する案内図作りにと、発展していきました。今では、この地図は町内会で観光客に配布しております。昨年秋には、地図を基に地域での「自然・歴史・景観を探る」見学会を計画、それぞれの専門の先生方のご協力を頂きながら、90名以上の参加者を得て大成功に終わりました。今年は、保育園児にウミネコを見てもらおうと計画中です。

私は、観察会での先生方のように、説明は出来ませんが、自分の住む町の見どころや、楽しみ方は、伝えられるような気がします。

そして、私が関わったことで、町づくりや環境づくりに目を向ける仲間が増えることに、役立てば幸いと願っております。

